鳥取環境大学紀要
創刊号（2003.2）pp.41－60

東アジア漂海民と家船居住

Sea Nomads and their Boat Dwelling in Eastern Asia

浅川　滋男

ASAKAWA Shigeo

和文要旨：東アジアから東南アジアにかけての海岸域と大河川流域には、船を住まいとする「家船居住」の伝統を広範に確認できる。この広域的分布を図示しながら、各地に展開する「家船居住」の特異性と共通性を示すことが前半の目的である。とくに日本においては、アマと家船の相関性が強く、両者の分布を重ねあわせることで、家船を「磯場採集型」と「回遊漁撈型」の二系統に大別できることをあきらかにした。後半では、能登半島海士町・舳倉島や丹後半島伊根の住居と船屋、あるいは中国海南島の三亜などにみられる蛋民の「棚屋」を例にとり、家船居住民の陸地定住化について考察した。家船と船屋の相関性、あるいは家船の空間構成が住居の間取りに与えた影響を具体的事例に基づいて推定している。最後に、魏志倭人伝にみえる「倭の水人」とアマの近似性に着目し、大林太良のいう弥生時代「江南系」漁撈文化の伝播の背景として、素朴な居住性をともなう丸木船の存在があった可能性にも言及した。
【キーワード】漂海民、家船、蛋民、アマ、陸地定住化

Abstract ： The tradition of boat dwelling is widely distributed around the sea-shores and big rivers in Eastern and South-east Asia. In the first, I have pointed out both sides of the peculiarity and the universality of boat dwelling system with distribution maps. Especially in Japan, there is a clear relation of *Ama* (woman divers) and boat dwelling. Comparing the distribution of *Ama* with that of boat dwelling, I could have made it clear to divided boat dwelling roughly into two types. The one is the type gathering in rocky shore, another is the type of migratory fishing. In the second, I considered about the process of boat peoples settlement on the lands by the datas of the peninsulars and islands in Japan and *Hainan* island of China. I estimate the influence that the house boat gave to the spatial organization of the fisherman's residence on the lands. Finally, I picked up the problem of "the water-men of *Wa*(倭) " in the famous Chinese ancient document called " *Gishi Wajin-den* (魏志倭人伝". Paying attention to the similarity between "the water-men of *Wa* " and *Ama* , I referred to the existence of the dugout with simple dwelling function.
【Keywords】sea nomads, boat dwelling, *Dan* people, *Ama* , Settlement on the lands

１．船に住む人びと

１－１　灘江の鵜飼と住宿船

わたしがはじめて船住まいの人びとをみたのは、1984年のことである。昆明から列車に乗って桂林で下車し、そこでお決まりの灘江下り観光に加わった。遊覧船にのってしばらくすると、竹の筏をこぐ漁民が鵜飼[1)]をしている。その筏船が次々と遊覧船に近づいてきた（図 1)。漁師たちは、鵜が銜えてきたばかりの鮮魚を、遊覧船の主人に売りつけている。わたしたちが船内でとった昼食は「火鍋」であったが、肉や蔬菜とともに捕れたての魚が、しゃぶしゃぶの材料となった。その淡水魚のスライスは泥臭くもなく、胡麻風味のたれによくあって、とても美味しかったように記憶している。

漁師たちが鵜飼をしていたカルスト地形の深い澱みをぬけると浅瀬になって、岸辺の砂浜に停泊する「家船（えぶね）」の群れを発見した（図 2)。苫編みの屋根をかぶせた素朴な板船（サンパン）だから、香港でいうところの「住家艇」に相当するタイプであり、桂林周辺ではそれを「住宿船」と呼ぶ。

砂浜にはカマボコのような形をした倉庫風の建物が点々と並んでいて、そこが船に住む人びとのかりそめの定着地であることをうかがわせた。さきほどみたばかりの筏船も「住宿船」のあいだに浮かんでいるから、鵜飼をしていたのは近隣の農民ではなく、この船住まいの人たちだったのであろう。

そのとき「蛋民(たんみん)」という言葉が頭をかすめた。そうか、これが南方中国の大河川を漂泊する「蛋民」なのか。それにしても、灘江でみた「住宿船」の集団は、可児弘明の名著『香港の水上居民』[2]で知られる「蛋民」のイメージとは、あまりにもかけはなれている。香港の「蛋民」は、船住まいの漁撈集団というよりも、都市に寄生する海上スクウォッターとしての印象を強く与えているが、灘江の「蛋民」は田園地帯でひそやかに鵜飼や投網漁にいそしむ内陸の漁民であった。しかし、たしかに後背地には、そう大きくはないけれども、都市化した集落が控えている。船住まいの人びとは、この集落の居住者や遊覧船に漁獲物を供給して生計をたてているのだが、魚が捕れなくなったら、また別の土地に移住していくのだろうか。

１－２　蛋民とは何か

蛋民とは、主として珠江流域を中心とする両広(広東・広西)の河岸・沿岸域において船住まいをする漁撈民をさす[3]。上に紹介した　灘もまた珠江の支流の一つである。呼称としては、「蛋民」のほか「蛋戸」「蜑民」「蜑家」なども知られているが、「蛋」とは卵の白身のことだから、字義としては「蜑」を用いるほうが適切である。

「蜑」の語が文献にあらわれるのは、晋の『華陽国志』からで、貴州・雲南方面の西南少数民族を「夷蜑」もしくは「蛮蜑」と一括する。唐代には南詔の民を「夷蜑」「蛮蜑」と呼んでおり、ここにはあきらかに辺境諸民族に対する蔑視の含意を読みとれる。これらの記録から、「蛋民」の起源を古代百越の一群に求める見解もみられた[4]が、唐代以前の文献には「蜑」が水や船や漁撈と結びつく記載がほとんどない。宋代になって、「蜑」を船住まいの漁民とする描写がようやくあらわれる。その初見は、10 世紀末に楽史が著した地理書『太平寰宇記』巻 157 ・嶺南道一・新会県の条である。

蜑戸。県所管。生在江海。居於舟船。随潮往来。
捕魚為業、若居平陸死亡。即多似江東白水郎。

「舟船に居し、潮に随いて往来し、捕魚を業となす」というのは、まさしく蛋民の本質をついており、「陸地に住めば死んでしまう」とまで述べている。しかも、蜑戸の多くは「江東の白水郎に似る」という。白水とは「泉」の字を上下に分解した語であって、それに「郎」をつけた「白水郎」は福建省泉州方面にいた潜水漁撈民をさす。ちなみに日本でも、風土記や万葉集などの古代文献から江戸時代の和漢三才図絵に至るまで「白水郎」の表記がみられ、それをアマと訓読する（蜑もまたアマと訓む）[5]。後述するように、日本ではアマと家船の関係はきわめて緊密である[6]が、中国の蛋民もまた網漁や釣りだけでなく、潜水による貝類の捕採に秀でていた。南宋の範成大『桂海虞衡志』志蛮は、以下のように記している。

蜑。海上水居蛮也。以舟楫為家。採海物為生。
且生食之。入水能視。合浦珠池蚌蛤。惟蜑能没水
探取。傍人以縄繋其腰。縄動揺則引。

合浦の珠池は真珠の産地であり、船住まいの人びとは、真珠を産する蚌蛤(ほうこう)(どぶがい)をそこで探し取っていた。『嶺外代答』の著者、南宋の周去非は、この種の潜水漁民をとくに「蚝蛋」と呼ぶ。清の陸次雲『峒谿纖志』にも、以下のような類似する記載がある。

蛋人。以舟為宅。頻海而居。其人目皆青碧。
能弁水色知龍所在。引縄入水採螺蚌以為業。
能伏水三日。手持利刀以拒蛟螭。又曰龍戸。
又曰昆崙奴。其人皆蛇種。故祭祀皆祀蛇神。

ここにいう蛟螭とは、おそらく海蛇の類であり、「龍戸」「昆崙奴」と呼ばれた蛋民たちは蛇神を祀っていた。これもまた、日本の海人信仰とよく似ている[7]。

船に住んで水上を漂泊する人びとは、陸上に定住する土地を所有しないというその一点において、陸上居民から蔑視の対象となり、ために古代の蛮族をよぶ「蜑」の字を集団名としてあてがわれた。かれらの多くは、漁撈という生業活動をとりさってしまえば、周辺の陸上定住民とほぼ同じ方言と文化を共有する漢族の地方集団である。もっとも、華南漢族の地方集団とは、「南蛮」「百越」などの古代南方諸民族が中原華北方面から南下した支配勢力と混血同化した人びとの末裔であるから、蛋民と陸上定住民とに拘わらず、いわゆる古越族(江南先住民)の血脈を否定しえるものではない[8]。じっさい、船住まいの漁民については、『漢書』五行志・巻 27 ・中之上に「呉の地、船を以て家と為し、魚を以て食と為す」とあるから、いにしえの呉の船住漁民と両広の蛋民には連続性を否定しえないのである。

こういう古い伝統を母胎としながらも、南方中国において、水上生活者の劇的な増加をみるのは、南北の人口比率が逆転した宋代の初めころであった。絶え間なく進展する都市化にともない、周辺の農漁村から大量の人口があふれ出して、拡張する都市社会へ寄生するようになり、土地をもたない水上生活民が大量に発生した。それ

図 1　灘江の鵜飼（浅川撮影 1984）

図 2　灘江の家船（浅川撮影 1984）

図 3　タイ王国ウータイタニのサカェクラン川に浮かぶ筏住居群
（浅川撮影 2001）

図 4　ベトナム・フエ市香河の家船群（浅川撮影 2002）

図 5　香港鯉魚門の家船と水上集落（浅川撮影 2001）

図 6　中国広州市沙面の「魚欄」に停泊する漁船
（居住性を備える：浅川撮影 2001）

図 7　海南島三亜の蛋民「棚屋」群
（背景に新築の高層住居がみえる：浅川撮影 1984）

図 8　三亜「棚屋」対面の新築 RC 住宅（浅川撮影 1984）

図 9　マカオのコロアネ島船人街の水上華人集落
（浅川撮影 2001）

図 10　マレーシアのケタム島の水上華人集落
（浅川撮影 2001）

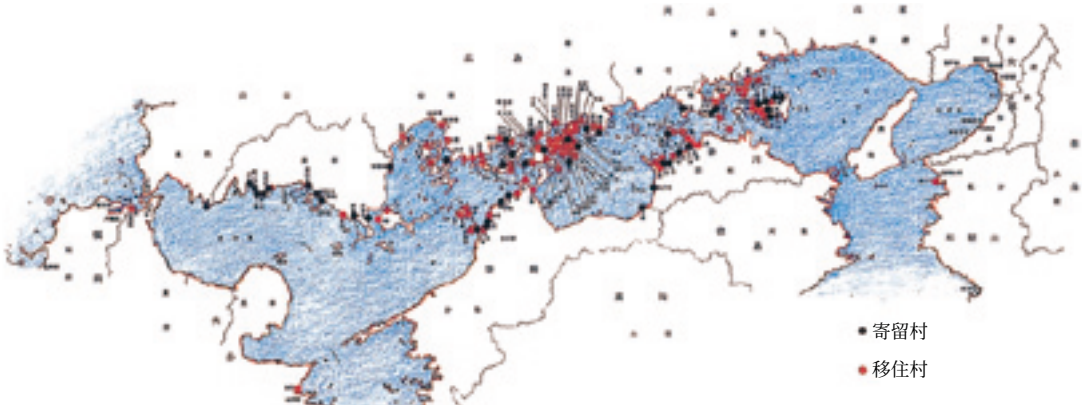


図 11　瀬戸内海周辺における能地と二窓の枝村分布 1709 ～ 1897（広島県教育委員会の原図を改変）

図 12　石川県富来町赤崎
（左側が主屋、右側が船小屋：浅川撮影 2000）

図 13　舳倉島の船屋型住居群　道路の対面にこれと瓜二つの船屋を配置する場合が少なくない。

図 14　輪島市海士町の町並み（浅川撮影 2000）

図 15　丹後半島伊根の船屋群（浅川撮影 2000）

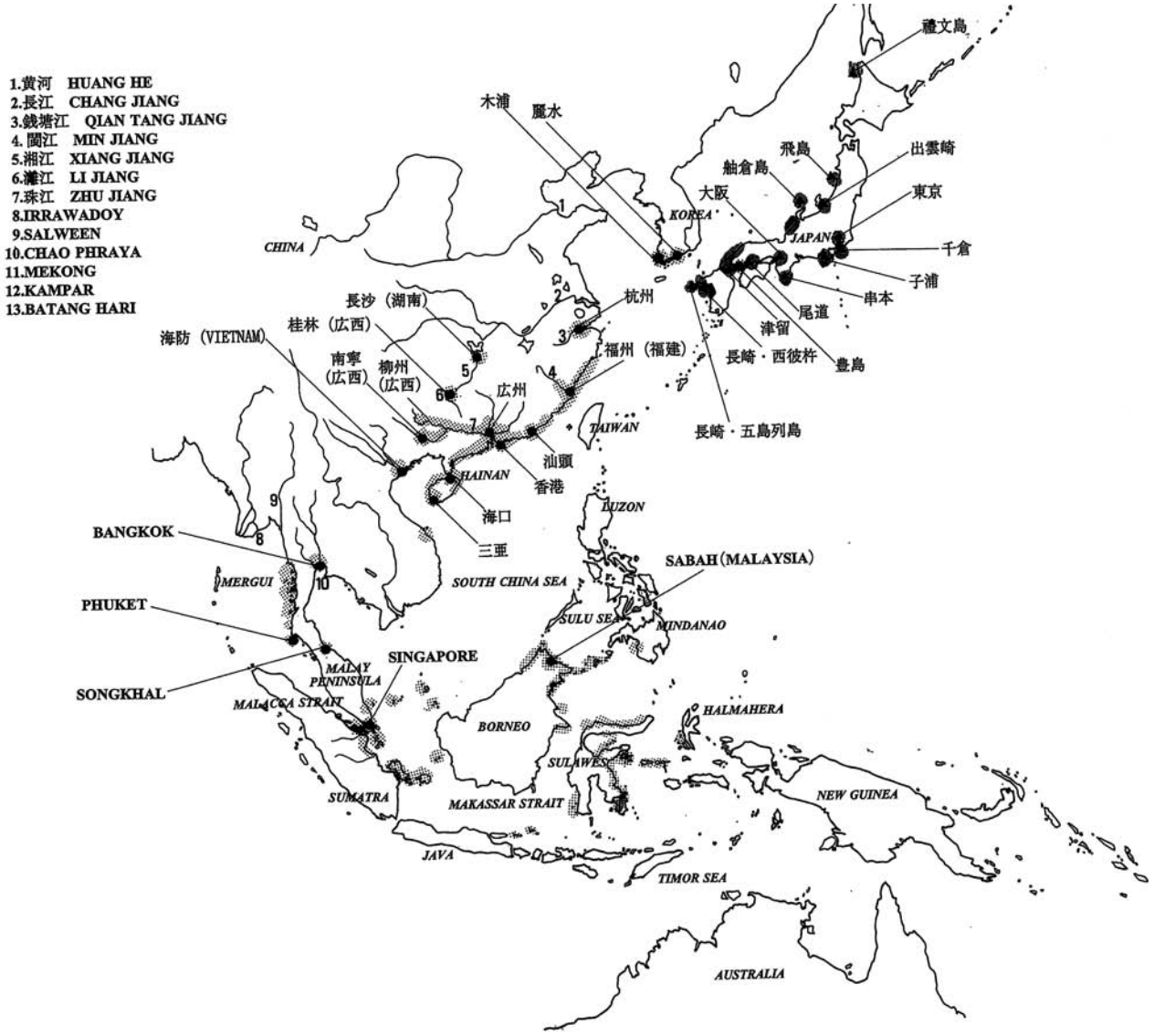


図 16　東アジア・東南アジアにおける家船居住の分布（長沼さやか・浅川作成 2000）

はとりわけ、王朝交代や革命などの社会的激動期に爆発的に増大したものと思われる。かれらはただ漁撈に従うのではなく、渡船、糞尿・塵芥の運搬処理、売春など都市社会の影の労働を担う最下層民でもあった。その傾向は広州、福州、南寧、香港などの大都市において顕著に露呈していた。こういう流民としての水上生活者は、厳密な見方をするならば、古代の家船漁民とは異質な集団であったはずだが、長い歴史のなかで両者は徐々に融合し、陸上に定住しない「流れ者」として蔑視される傾向を増していったのではないだろうか。灘江の船住者たちは、どちらかといえば、漁民としての水上生活者の古態をとどめる例といえるのかもしれない。

１－３　漂海民たち

「漂海民」という用語[9]は、今でもそれほど人口に膾炙しているわけではない。これに対応する英語に、Sea Gypsies（海のジプシー）もしくは Sea Nomads（海の放浪者）がある。前者は今世紀初めにビルマのメルグイ諸島に滞在して、モーケン族の詳細な記録を残した G.W.ホワイトがその民族誌のタイトルとしたことで知られ[10]、後者は東南アジアの船上生活者を文献的に整理した D.E.ソファーがやはりその書名としている[11]。日本では、羽原又吉の『漂海民』[12]がこの種の研究の先駆をなす。羽原は、漂海民を以下のように定義している。

(1)土地・建物を陸上に直接所有しない。

(2)小舟を住居にして一家族が暮している。

(3)海産物を中心とする各種の採取に従い、それを販売もしくは農作物と交換しながら、一ヵ所に長くとどまらず、一定の海域をたえず移動している。

この３つの条件を満たす船上生活者は、もちろん両広の蛋民だけではない。東アジアから東南アジアの海洋沿岸域を中心に、ひろく分布している（図 16）。中国では、

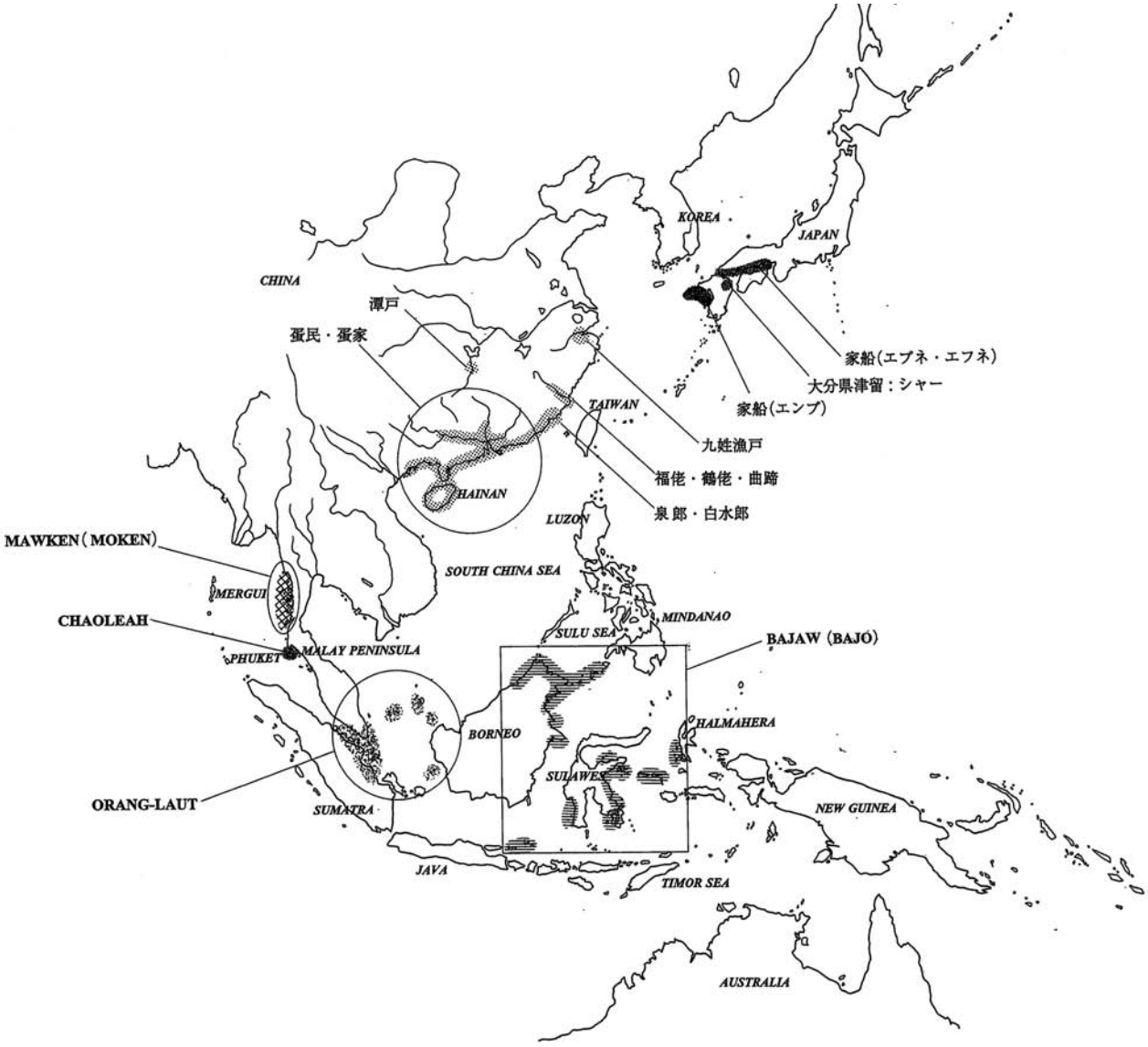


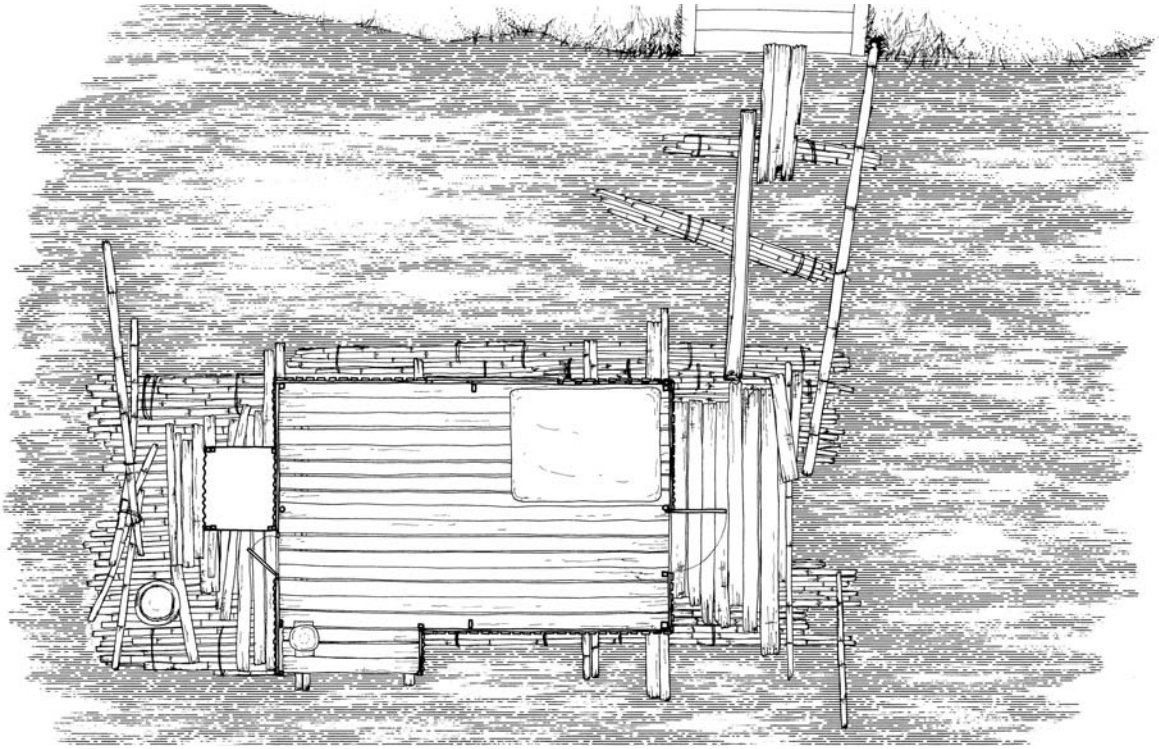
図 17　東アジア・東南アジアにおける家船の呼称分布（長沼さやか・浅川作成 2000）

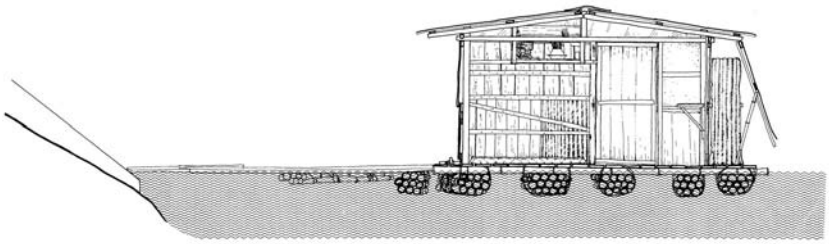
福建の閩江流域に「福佬」「白水郎」、浙江の銭塘江流域に「九姓五戸」、長沙の湘江流域に「潭戸」などと呼ばれる同類の集団が存在する（図 17）。

すでにみたように、南方中国の場合、海岸線に限らず、内陸の大河川流域に船住漁民の分布をみるところに特徴がある。それは、大河川が豊富な魚類資源を有するだけでなく、交通・流通の重要な幹線をなしていたという事実を、如実に物語っている。東南アジアでも、タイ内陸部のウータイタニやピサノロークの都市内河川に筏住居が数多く現存している（図 3 ・ 18）これは河川敷スクウォッターの変形とよぶべき住居群で、養魚はおこなうが漁労が主生業ではなく、あきらかに都市の下層労働者たちの住まいとして位置づけられる。一方、ベトナム中部フエの香河流域にも、約 2 万艘の家船が現存し（図 4）、都市域のそれは自転車タクシーやポン引きなど都市下層労働者の住まいだが、大半を占める上流域と下流潟湖の家船居住民は漁労専従者である。また、カンボジアのトンレサップ湖にもおびただしい数の船住漁撈集団がいるという。

東南アジアでは、海岸線を漂泊する船上生活者をオラン・ラウト(Orang-laut)と総称する。オラン・ラウトとは「海の人」を意味するマレー語である。狭義にはマレーシア先端のジョホール地方、スマトラ東岸、ボルネオ西岸のプロトマレー系漂海民をさす。このほかにも、ビルマのメルグイ諸島周辺を遊動するモーケン(Mawken)、スール諸島のサマル(Samal)、ボルネオ西北岸、ミンダナオ南岸、ハルマヘラ西岸からスラウェシの海岸線と周辺島嶼を遊動するバジャウ(Bajau)などの集団が知られている（図 17）[14)]。

ところで、バジャウとは「海賊」のことであり、漂海民たちは魚介類の捕採を主生業とするかたわら、ときに海賊・匪賊と化して陸地の生活者を悩ませた。こういう





上：平面図　1:100

左：断面図　1:100

下：パース

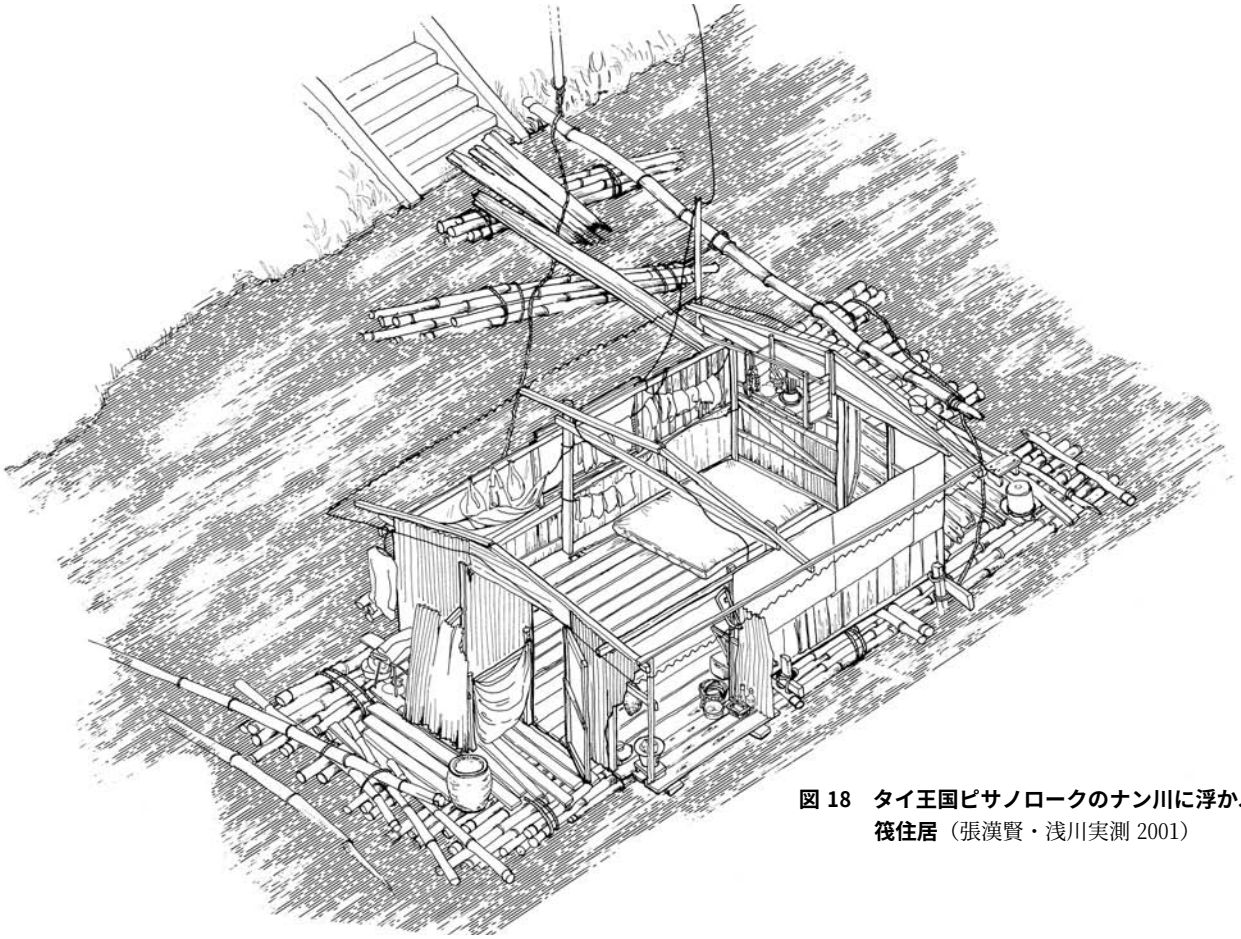


図 18　タイ王国ピサノロークのナン川に浮かぶ筏住居（張漢賢・浅川実測 2001）

半漁半賊的な性格は、東南アジアだけでなく、中国の蛋民や日本の家船漁民とも共通する。西日本の漂海民は中世以降、広大な海のネットワークを組織して水軍もしくは倭寇と化し、その波は朝鮮半島多島海の海人、舟山列島をはじめとする華南の海人をも巻き込んだ[15]。東シナ海沿岸の蛋民もしばしば倭寇と結託するなど、陸地定住者から収奪を働いたのである。この「海賊」としての側面が、漂海民に対する偏見をいっそう増幅させたことは想像に難くない。

今では瀬戸内海の豊島などをのぞいてほぼ消滅してしまった[16]が、日本列島もまた、船住まいの漂海民が海岸線に点々と分布する地域であった。分布のセンターは、瀬戸内海と長崎県の西彼杵半島および五島列島であり、「家船」(エブネ、エンブ)という呼称は長崎方言であるという。ちなみに、日本の家船を最初に紹介した文献は、福岡出身の貝原益軒が著した『日本釈名』で、その中巻の「蜑」の条には、「常に船を家として、陸にすまぬもあり。俗に家ふねという。年老いては船の中を子にゆずりて、隠居して舳のかたにすむ」という的確な描写がなされている。

図 19　日本列島におけるアマと家船の分布
（アマの分布は瀬川 1955 の原図による）

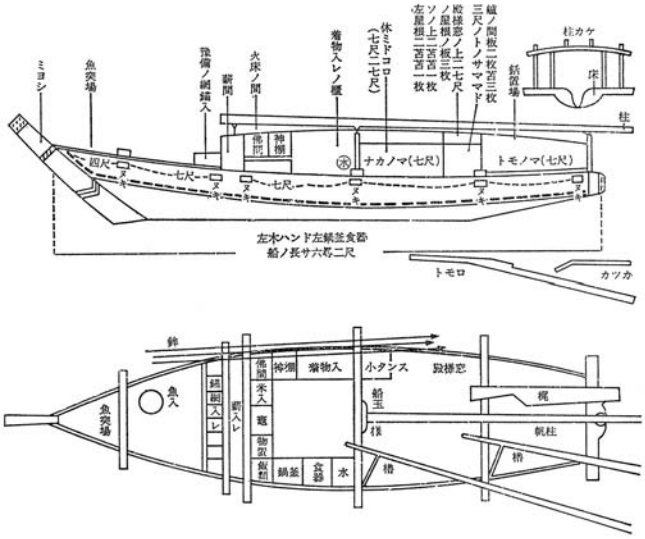
２．日本の家船

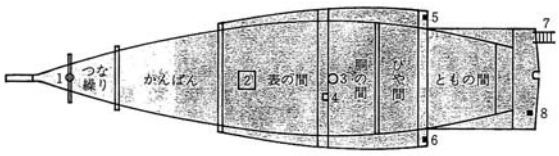
２－１　二つの系統

日本における家船とアマ(海士・海女)の分布を重ね合わせると、興味深い相関性を導きだせる（図 19）。家船を二つの系統に大別できるのである。一つは日本海および太平洋に面する磯場でアワビ、サザエなどの貝類とエゴ、テングサなどの海藻類を潜水して捕採する一群である。魚類を銛突きなどで捕るのも男(海士)の仕事の一つだが、女(海女)は貝藻類や海鼠、海胆などの採集に精力を傾ける。それら魚以外の獲物のほうが、換金資源として価値が高かった。とりわけアワビ(鰒・鮑)は古代より、皇族・貴族への贄もしくは調として西日本各地の海部から献上されている。2000 年 8 月の時点において、筆者が所属した奈良国立文化財研究所（現在の独立行政法人文化財研究所）の木簡データベースで「鰒」「鮑」を検索すると、前者は 147 点、後者は 42 点がヒットした。その大半が海部から平城宮へもたらされた荷札木簡である。

アワビや海藻の乱獲がすぎると、そこはただの岩礁にすぎない。そうなると、新たな漁場を求めて居地を変えざるをえない。西日本におけるアマのセンターであった筑前鐘ヶ崎（福岡県宗像郡岬村）からは、壱岐・対馬や山陰などの周辺地域にとどまらず、能登半島にまで漁場を求めて出稼ぎや移住がくりかえされたようである[17]。『対馬島誌』[18]の紹介する宝永六年(1709)の文書類によると、鐘ヶ崎から厳原町曲に出漁した海士は、「常に海上住居の儀にござ候らえば、地につきたる領分と申すことこれなく」、また「その当初、無居住の漁夫にて、宅地・田畑など寸分もこれなく候」であったが、宝暦二年ころから鐘ヶ崎との往復をやめて、対馬に拠点をおくようになり、対馬藩も曲だけを漁撈専業の浦として認可した。曲のアマたちは、この利権に従い、対馬の磯場全域に出漁していったのである。

戦前、志摩の海女は竹島や礼文島、利尻島にまでテングサ採りに出かけているし、逆に済州島の海女は房総半島や伊豆諸島の近海でアワビ採りに活躍している[19]。ちなみに、天平十七年[745]の平城宮木簡に、「耽羅鮑六斤」が志摩国から貢納されたことが記されており、耽羅(済州島)と日本との交流が相当古くからあった可能性を示唆している。瀬川清子の『海女』によると[20]、福井県梅浦の海女は、長さ 12 mほどの漁船にのり、能登、敦賀、丹後から出雲の美保関、石見にまで磯場を求めた。2 ～ 3 艘が組になり、老人、子供をひきつれて、米・味噌持参の上、船に住んで漁を続けた。一方、丹後半島袖志の海女は、越前から但馬の海岸線にヌスト舟と呼ぶ足の速い船で出漁した。船には米・味噌・醤油・鍋を積み込み、船





1 やほ　2 火床(いろり)　3 ほんば(本帆)　4 船玉様　5 わきろ　6 まえろ
7 はしご(海女はここから船にあがる。昭和になってから着装された)　8 ともろ
火　床　海女の採暖用の施設。四季をとおして使用する
船玉様　本柱の左(トリカジ側)に埋める
かんばん　船頭夫婦の寝間。昼間は寝具などをしまう
表の間　海女の作業場兼寝間
胴の間　ママタキの寝間
ひや間　炊事場(かまど，水がめ，米，薪など)
ともの間　船頭の仕事場

図 20［左］　**西彼杵半島瀬戸町の家船実測図**
（木島 1944 から転載）
図 21［右］　**対馬曲の五尋船復元図**（柴田 1984 から転載）

内や洞穴、船小屋を利用したり、時には浜に小屋掛けして夜露をしのいだ。このタイプの家船居住民は、漁撈よりも貝藻類の採集に重きをおくから、ここでは「磯場採集型」と呼ぶことにしよう。

これに対して、アワビの採れない瀬戸内海では、「回遊漁撈型」と呼ぶべき家船集落が広域的に展開した。家船の拠点となっていたのは、広島県の旧豊田郡にあって近隣する能地（のうじ）と二窓（ふたまど）である[21]。能地は「浮きタイ」漁の名所として知られるが、テグリモンと呼ばれるほどに手繰網漁に長けていた。一方、二窓は延縄（はえなわ）漁をおこなった。また、尾道市吉和（よしわ）の家船は延縄だけでなく、一本釣りを得意とした[22]。かれらは決められた海域を絶え間なく回遊し続けたが、盆と正月には必ず根拠地に戻るというしきたりもあった。さらに注目すべきは、瀬戸内海の四方をめぐるひろい海岸線に枝村をつくったことである。善行寺の過去帳と宗旨宗門人別改帳によれば、能地と二窓の枝村の数は、宝永六年(1709)から明治 30 年(1897)まで約 200 年間で 150 ヶ所を超え、福岡・山口・広島・岡山・愛媛・香川の六県に及んでいる（図 11）。母村の人口がふくれあがると、地先の漁場が荒廃する。そこで分家をおこない、船おろしをした何艘かが組になって、新たな入江を選び、寄留から移住という経過を踏んで枝村が形成されたのである。

おそらく大分県の東海岸地域も、家船による枝村の浸食が進んだ地域であったろう。筆者が調査経験のある大分県杵築市の納屋という漁村は、その地名のとおり、もとは漁具置場であって、他地域から漂泊した漁夫三名により開拓されたという伝承をもっている[23]。かれらはイッケウチ（一家内）と称する同族的な親族組織を母胎にして、排他的な漁撈集団を継承し、周辺漁村との軋轢が絶えなかった。しかし、杵築藩の庇護により、地先の漁業権を独占し、唯一の純漁村として繁栄を遂げていった。こういう足跡は、西彼杵半島の家船、対馬藩の曲、能登半島の輪島海士町などのケースとよく似ている。定着的な半農半漁の村に比べれば、かれら漂海民が特殊な漁法に秀でていたからではないだろうか。

瀬戸内以上に広域的な回遊漁撈をおこなったのが、沖縄本島糸満の漁民である[24]。糸満は母村が沖縄本島第三の集落であり、出漁時にだけ船住まいをする。かれらは小型のサバニに乗り込んで、南西諸島周辺の海域を回遊するだけでなく、あるときは高知・愛媛から房総半島、あるときは五島列島から山陰方面、さらにフィリピンやサイパンなどの南洋にまで出漁していった。その枝村は、近くは「漁業の空白地」と呼ばれた奄美方面に多く、遠くは伊豆諸島から房総半島に及んでいる。

陸上の定住集落を有する糸満漁民のサバニを例外とすれば、瀬戸内海に典型的な「回遊漁撈型」の家船は、「磯場採集型」の家船に比べて、はるかに居住性が高かった。後者が移動に重きをおき、実際には浜に小屋掛けして仮の宿とすることが多かったのに対し、前者はよほど海が荒れない限り、陸上に避難することはなかったという。いずれにしても、漁民として生をまっとうするには不断に獲物が必要であり、獲物の多い好漁場を求めるからこそ、船を住まいとして海を漂うほかなかったのである。

２－２　家船の空間と構造

それでは、家船はどのような構造をしていたのだろうか。戦前に西彼杵半島瀬戸町で、2 年半におよぶ住み込み調査をおこなった木島甚久は、肥前家船の詳細な図面記録を残している（図 20）[25]。船の長さは六尋二尺(10.4m)で、櫓は左舷に二丁おく。ミヨシ(舳)側に「魚突場」と「魚入」を配し、船内は前方からオモテノマ(薪間)、ドウノマ(火床の間)、ナカノマ(休ミドコロ)、トモノマ(艫の間)に分かれる。オモテノマは「薪入れ」のための狭いスペースで、船覆いの苫もここにしまった。屋根は部屋ごとに分けて苫を葺き、漁撈の都合によってはそれをはずして、薪間に納めたのである。居間にあたるのは「火床の間」で、薪間境の中央に竈を置き、右側に仏間、神棚、

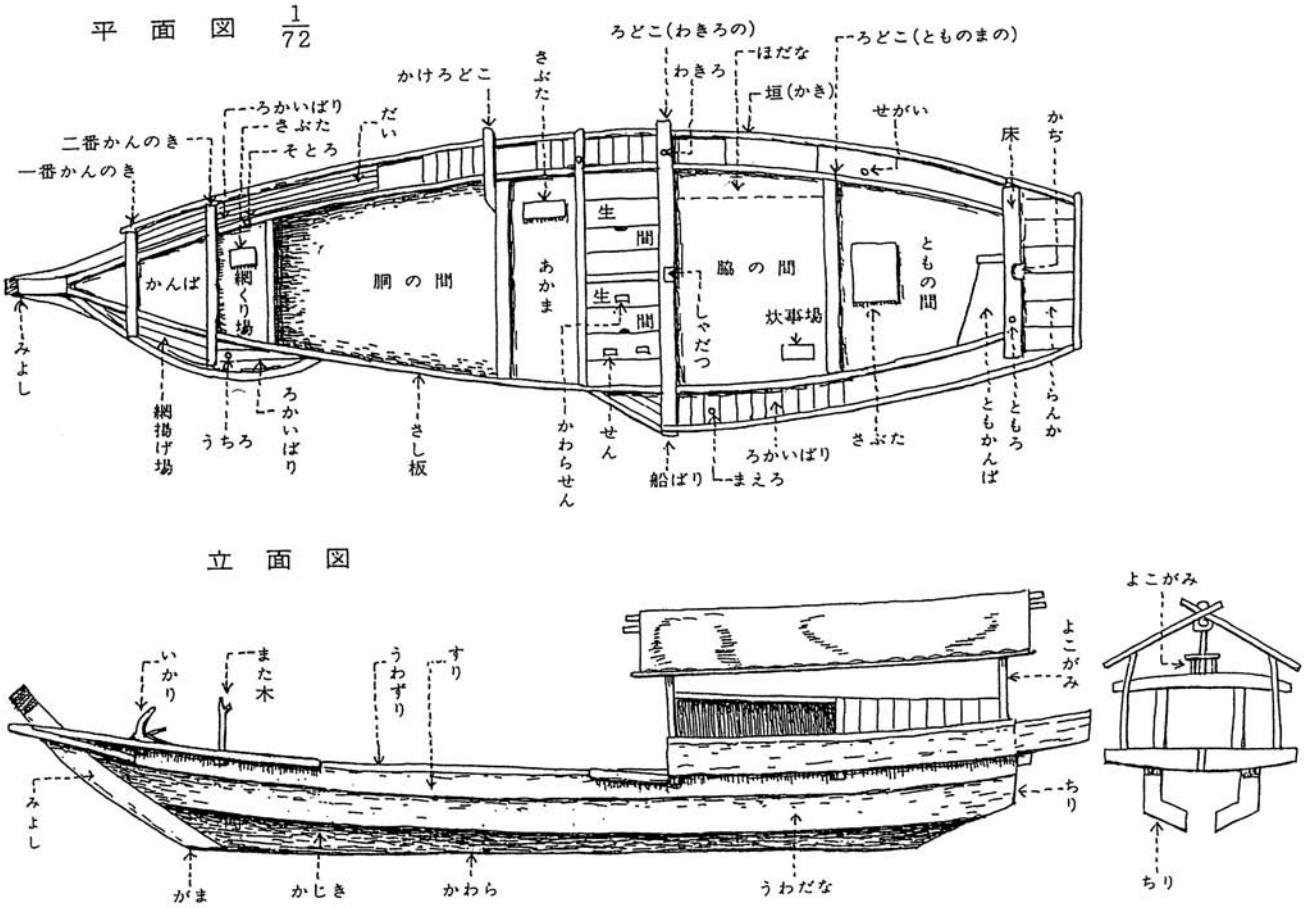


図 22　能地の家船（広島県教育委員会 1970 から転載）

着物入、左側に鍋釜、食器、水瓶などを配した。七尺四方のナカノマは左右に仕切られており、左側が櫓漕ぎ場、右側は「殿の間」と呼ばれて三尺の「殿様窓」をあける。「船玉」はドウノマとナカノマ境の中央に祀る。帆もこの位置にたてる。トモノマは右側が梶取り場、左側が櫓漕ぎ場である。

対馬曲の家船は、テント船もしくは五尋船（いつひろぶね）と呼ばれた。三丁櫓で、古くは筵帆、明治末から木綿帆になった。これに通常 6 人が乗る。船頭夫婦と一人前の海女 2 人、ママタキと呼ばれる半人前の海女 2 人の計六人である。柴田恵司の復原によると[26]、ヤホ(舳)から艫にむかって、ツナクリ、カンパン(船頭夫婦の寝間)、オモテノマ(海女の作業場兼寝間)、ドウノマ(ママタキの寝間)、ヒヤマ(炊事場)、トモノマと続く。オモテノマ、ドウノマ、ヒヤマの部分には、船側板に「中棚」をはりだす（図 21)。

「回遊漁撈型」の瀬戸内海では、大正年間からモーター付きの発動機船が普及した。尾道市吉和の例をみると[27]、船自体は長さ 9m、幅 1.2 ～ 1.8m と小振りだが、船の左右全体に「外台」をはりだして生活空間をひろげている。これは波除けの効果もある。舳から後方に向かって「長間」「小間」「生間」「胴の間」「艫の間」に分かれ、モーターは「胴の間」に据えた。起居の場は「長間」「小間」「胴の間」である。この船に平均 8 人の家族をのせ、瀬戸内海から九州、五島にまで出漁していった。因島箱崎の家船は平均 4 尋と小さく、夫婦を所帯の単位として、長男でも結婚すると別船をもった[28]。船の床には簀子を敷き、その下にあらゆる所帯道具を収納していた。屋根は股木を 4 本たて、カラカイという木を組み、苫で葺いた。弓削島に茅が多く、そこで編んだ苫を買ってきて屋根を葺く。12 枚の苫を用いて船を包むようにするのだが、雨が 3 日も降ると苫が水を含んで重くなる。そこでテントを用いるようになったが、テントは夏に暑く冬に寒かったという（図 22)。

２－３　舳倉島

舳倉島（へぐらじま）は輪島の沖 48km に浮かぶ海女の島である。島の周囲はわずか 4km、輝石安山岩をベースとする火山島であるが、龍神池と称する旧火口周辺の高さは標高 13m にすぎず、東北に緩く傾斜した水成岩が板状節理をなす。この火口に近い西岸の岩場が貝藻類の漁場であり、東岸には北ズラ、本村、小岩、出村、西村、三軒家、大和田という 7 つの集落が線状に展開している[29]。もとは輪島市海士町の人びとが夏の数ヶ月だけ、アワビとエゴ採りのために移り住む島であった。一部の人だけが島に渡る

のではない。六月の初めころ、海士町の全家が島渡りをした。瀬川清子によれば[30]、「家財道具を積み込み大人も子供も乗り込んだ小舟が五・六杯ずつ発動機船にひかれて島渡りをするのである。共同の漁場だから、勝手に早く渡ることは許されない。先生三人、お寺様、おいしゃ様、おまわりさんも一緒に渡る」のであり、宮本常一によれば[31]、「一つの天国として、毎年島へわたることをたのしみにした」という。船が島に着くと、まず区長が一軒一軒しらべて歩き、異常がなければ各々「夏の住居」におちついた。しかし、「中には船を家にしている者もあった。古い時代の名残りである」と宮本は述べている。9月までこうした舳倉島で生活が続き、10月から年末にかけては灘廻りといって、コテント船で移動しながら生活したり、浜の家を間借りしていたという。

海士町・舳倉島の住民は、肥前鐘ヶ崎から移住してきたという伝承をもっている。『輪島誌』の記すその内容を転記しておく[32]。

> 土俗の伝うる所によれば、永禄年間［1558-69］筑前鐘ヶ崎の海人又兵衛なるもの漁船三艘に男女十二人を率い能登国羽咋郡に漂着し、赤崎、千の浦の浦辺に仮小屋を作り、此処を根拠として同郡及び鳳至郡珠洲郡の沿岸島嶼に鮑を捕る。その後鳳至郡北浦北端（今猶海人屋敷と称しその遺蹟あり）に移住し、天正年中［1573-92］藩祖前田利家巡視し、熨斗鮑を献じて謁を賜い、舳倉島及び七つ島にて鮑を獲ることを許され、又毎年米塩を給し乾鮑及び熨斗鮑を納めしめ、時価を以て買い上げ諸運上及び米塩代に換算し、不足あれば納金を命じ、剰余あれば還付する等、特別の保護法を与えたり。寛永年間［1624-44］に至り男女百五十人となりしと雖も、猶一棟の仮屋に雑居せしかば、熨斗監督人の巡視するに際し、其の醜態見るに忍びざるものあり、依て転地を請願したりしに国主前田利常輪島町鳳至町の地内一千歩を割きて之を賜い住居を定めしむ。今の海士町是なり。

鐘ヶ崎からやって来たアマ集団が、熨斗鮑を献上することによって藩主の庇護をうけ好漁場を独占し、一千歩の宅地までも賜ったという筋書きである。これが真実であるとするならば、「よそもの」が特権を得て隆盛をきわめたわけだから、周辺から妬みの対象とならないわけはない。じじつ、近世初期まで舳倉島を漁場としていた輪島市西郊の名舟村とは相当の確執があったようである。

ところが、小嶋芳孝の研究によると[33]、伝承とは異なる来歴をうかがえる。海士町が提出した貞享五年[1688]の答弁書には、アマが西国からやってきたのは寛永年間の初め[1620年代]で、そのころは秋になると筑前に帰っていたと記されている。能登半島に定着しはじめるのは、寛永十七年[1640]からであったという。そして、慶安二年[1649]、加賀藩から与えられた輪島市光浦の居地が狭くなったので、輪島崎に土地を拝領したいと自ら願い出ているのである。一方、舳倉島に目を転ずると、寛永二年［1625］の絵図には、すでに集落が描かれており、これが今の本村の始まりと推定される。また、神社は式内社の奥津比咩神社だけが島の西岸よりに鎮座している。瀬川によれば「家も輪島より先に島にもつ」のが常識だとい

図 23　昭和 5 年ころの舳倉島（複写写真は古川知明氏の提供による）

うが、それは江戸時代でも同じことで、能登半島に先行して舳倉島での開拓を進めていた可能性が高いだろう。江戸時代の絵図としては、ほかにも天保二年[1831]とそれを模写した嘉永四年[1851]の二葉、さらに寛永と天保の中間に編年される一葉が残り、集落が本村から南側の出村、北側の北ズラへと東岸沿いに展開し、本村の伊勢神社のほか、蛭子、観音、金毘羅などの小堂が崖沿いに増えていく過程がわかる。

海士町に戻らない舳倉島での定住者がではじめたのは、1970 年ころからであるという。「よそもの」としての偏見や軋轢のない島での生活は、アマたちの天国であり、もっと早くから島への完全移住が進んでいてもおかしくはなかった。それを阻んだのは、冬季に厳しい北西からの季節風である。往時は素朴な樹皮葺きの掘立小屋であったから、その寒さと風圧に耐え兼ねたという。今では羽咋産の瓦を葺いて屋根を重くし、さらに太いロープを屋根に這わせて、風圧に抵抗している。

３．漂海民の陸上がり

３－１　七ツ島の廃屋

輪島と舳倉島の間に浮かぶ七ツ島では、江戸時代に名舟村の漁師が「トド漁」をおこなっていた。かれらの認識するトドとは、動物分類学的にいうところのニホンアシカであり、その骨は舳倉島の遺跡でも出土している。江戸時代、アシカの皮と油はたいへん商品価値が高かった。天明八年[1788]から、金沢商人を黒幕とするトド漁師が七ツ島にあらわれ、これに追い討ちをかけるように、寛政八年[1796]ころから舳倉島の海士が七ツ島に入ってきた。海士たちは貝藻類の捕採だけでなく、トドの密漁をおこなったため、名舟村との確執は熾烈をきわめたようである。しかし、明治になると乱獲がたたってトドがいなくなり、名舟村漁師の島渡りもとだえてしまう。以後は、もっぱらアワビや海藻の豊かな漁場として、舳倉島の分村と化した。七ツ島の大島や御厨屋（みくりや）島では、アマが仮住まいする切妻造樹皮葺の小屋が急斜面の等高線沿いに軒を連ねていた（図 24）が、昭和 40 年ころからそれも廃虚化してしまう。

地井昭夫は昭和 60 年にその廃屋を調査している（図 25）[34]。廃屋の多くは頑丈な船板を床に張り、縦方向に内部空間を三割りもしくは四割りにして妻側に入口をおいた。晩年の宮本常一が主張した「漁家住宅の典型的事例の一つである通り土間をもつ並列型住居は、南方からの舟住まい、この形式が陸上がりしてできたものであり、一部の町家もこうした影響を受けたのではないか」という仮説[35]に触発された地井は、七ツ島の廃屋について、

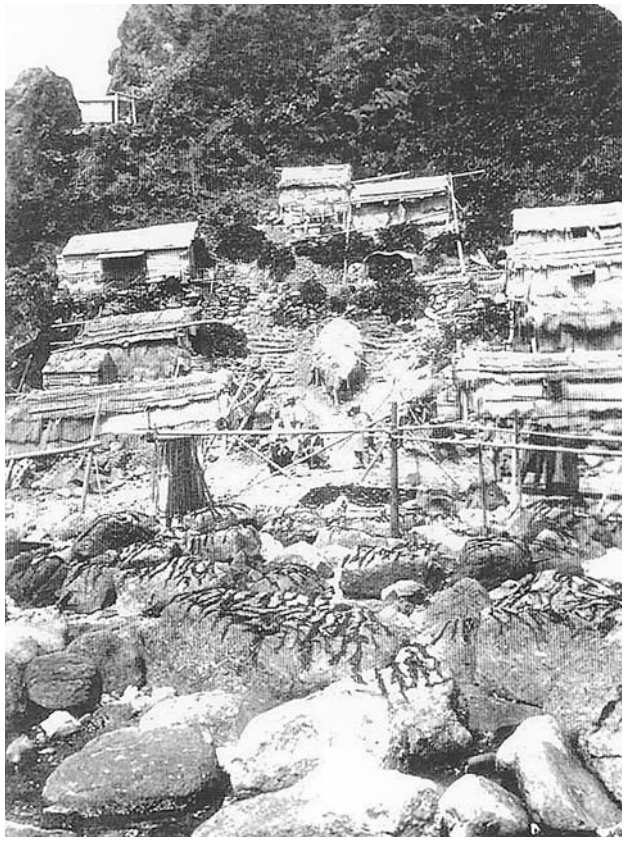


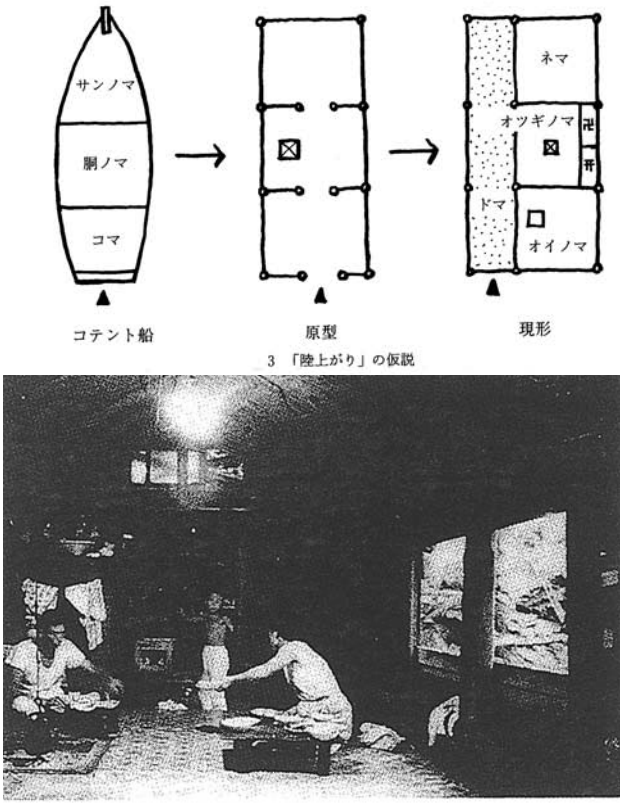
図 24　大島の仮設漁家
（昭和 5 年頃、複写写真は古川知明氏の提供による）

以下のような卓見を示している。

> この間取りは、明らかに海士町の人々が、戦前まで行っていたコテント船と呼ばれる行商船ですね、一家が乗って夏に採った鮑や海草類を積んで内浦や富山湾などに行商に出かけていた船、今でもお年寄りのなかにはこの船で生まれた方も多いのですが、そういうコテント船の間取りと、今日海女の家族の方々が住んでいる住居のちょうど中間的なものとして、位置づける空間構成を持っていることがわかります。

コテント船は舳から艫にむけて、サンノマ、胴ノマ、コマという 3 室に分かれており、それが七ツ島の船板住居(枝村の仮住まい)にみられる妻入縦 3 室型の「原型」平面に変化し、さらにドマを通して横にネマ、オツギノマ、オイノマの 3 室を並列させる定住漁家の「現形」平面に至ったという「陸上がりの仮説」である。

船形屋根に覆われたインドネシアの高床住居がそうであるように、海上を移動漂泊した民族が陸上に定着する場合、船の空間概念がしばしば住居に投影する。北海道東岸の岸辺や島嶼に残るオホーツク文化の住居跡が、前



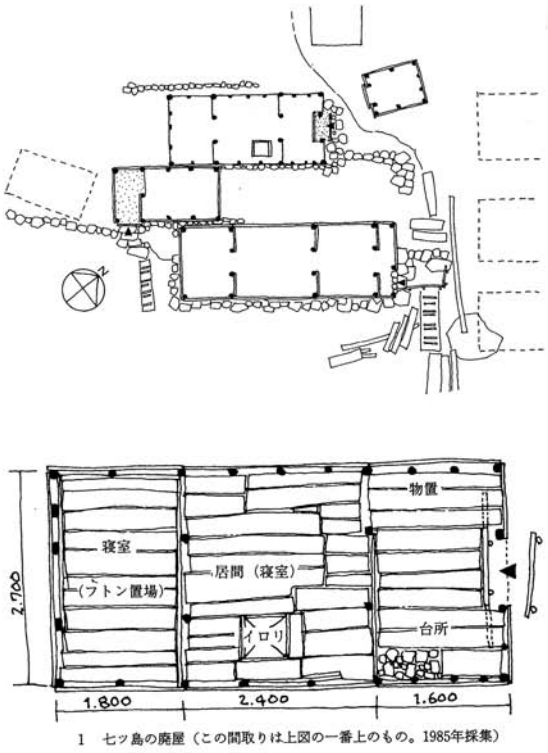


図 25　七ツ島の廃屋と陸上がりの仮説（地井 1989 から転載）

と後で突出度合いの異なる不整六角形平面を呈しているのも、おそらく海獣狩猟民をのせた船の形が投影したからであろう。それでは、近世以降の日本の漁民住居はどうであったのだろうか。宮本や地井が空想するように、漁村の住まいにも、船の残像を読みとることができるのであろうか。

３－２　船屋型住居

奥能登の海岸線を車で走っていると、道の両側に妻入の家屋が間隙なく軒を連ねる集落が次々とあらわれる。よくみると、浜側の建物は船屋か、それが建て替えられた納屋であり、山側の建物は主屋であることに気づくのだが、そうとは判別できないほど、左右の建物は趣きがよく似ている。これを最も鮮烈に印象づけるのが、輪島崎の海士町である。対岸の埠頭から眺めると、間口の狭い妻入の家屋がぎっしりと扇状に重なりあうパノラマ景観に圧倒される。海士町に隣あう崎町や鳳至（ふげし）町はもちろんのこと、海士町と係わりの深い舳倉島や赤崎にも、これと瓜二つの集落景観が展開している（図 12 ～ 14）。

船屋は船をおさめる施設であるから、船の形と寸法をもとに建設される。とうぜん間口は狭くて細長い妻入の建物になる[36]。ほんらい掘立柱に屋根を掛けただけの開放的な施設だが、船屋に家船を納めれば、そこはただちに仮設の住居となる。しかし、家船に住む漂海民が陸地に居を構えようとする場合、船屋を立てることがまず第一歩であった、と断言できるわけではない[37]。昭和 5 年ころの舳倉島を映した写真をみると、船は浜辺に放置されているものが圧倒的に多く、その正面に切妻造妻入の住居が並んでいる（図 23）。ここでは船と住居が対面しつつ入江の地形にそって線状に弧を描いているのである。ただし、一部に船屋らしい樹皮葺きの建物もみられ、草葺きの主屋らしい建物をその対面に確認できる。季節的な寄留段階では、船小屋よりも住まいを優先し、船は浜に放置しておいたものが、完全移住の結果、住居の正面に船小屋を作るケースも多かったのだろう。その場合でも、船と主屋は対置関係にあるから、居住空間はより直接的に家船の影響をうけていた可能性がないとはいえまい。

それにしても、能登の場合、船屋と主屋の外観があまりにもよく似ている。舳倉島の主屋は、妻入二階建の正面に小庇をつけており（図 13）、対面の船屋は平屋が多いけれども、やはり道路にむかって小庇をつけるので、外観上は左右対称の観を呈する。瓦葺きになったのは昭和 15 年以降のことで、その前は茅葺き、さらにその前は樹皮葺きであったという。当時はもちろん主屋も平屋であったから、左右の建物は今以上によく似た顔で対面し

ていたことだろう。主屋の規模はだいたい間口 4 間×奥行 5 間ぐらいが標準で、平面は通りぬけの土間をもつ 1 列 3 室型である。土間は、部分的に板を張って廊下とすることが多かった。居室側は最前列に幅半間のエンをおき、その後にオイの間(客間兼寝室)、オツギの間(イロリ部屋)、ネマの 3 室を並べる[38]。たしかにオイの間、オツギの間、ネマは、コテント船のサンノマ、胴ノマ、コマに対応しているかにみえる。古写真に映る舳倉島の樹皮葺き住居は、七ツ島の廃屋と同じ土間のない 3 室構成であった可能性もあり、樹皮葺きが茅葺きに変化する段階で、通りぬけの土間をとりこんだのかもしれない。

通りぬけの土間をもつ 1 列 3 室型の間取りは、日本全国どこにでもみられる町家の平面であるが、能登の漁村では、細長いけれどもそこそこ広い「うなぎの寝床」状の敷地は確保されていない。海士町に至っては、敷地が 15 坪前後とはなはだ狭いので、ニワと称する土間を通りぬけにせず、オツギの間をニワにはりだして、ズシの間(納戸)をその横に配する間取りが報告されている（図 26）。いずれにしても、15 ～ 20 坪ほどの敷地を確保するのがせいぜいだから、居住面積を増やそうとするならば、建物を高層化するほかない。いま海士町で 3 階建の新築家屋が多いのは、おそらくそのせいであろう（図 14）。家船あるいは船屋が住居の模範となり、その単位空間が人口集中による高密度化に刺激されて、集落の高層化をもたらしたとすれば、漁村の生活空間すべてに船の空間概念が影を落としていることになる[39]。

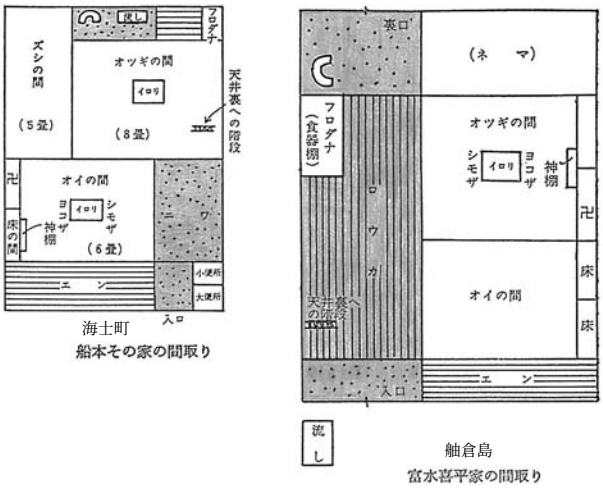


図 26　輪島市海士町・舳倉島の漁家間取り
（石川県立郷土博物館 1975 から転載、一部改変）

３－３　伊根と三亜

能登では港湾の埋め立てにともない、船屋が浜から遠ざかり、本来の機能を失って、漁具置場兼作業場に化しているケースが珍しくない。これもまた主屋と船屋の外観を近似させる要因の一つになっている。これに対して、丹後半島の伊根湾では、船屋本来の機能を充足させながら、居住の機能をもとりこむ近代化がなし遂げられた[40]。急峻な山裾がそのまま深海へとつながる波打ち際に、伊根の船屋はところ狭しと軒を連ねる（図 15）。戦前までは茅葺きの専用船庫であったが、道路拡幅にともなって宅地が減少を余儀なくされる際、船屋を瓦葺きの 2 階建に建て替えた。1 階は船庫で、2 階に和室を二間ほどつくり、そこを若者部屋もしくは老人の隠居部屋とした。便所と風呂場も階下に設けることが多い。その 1 階部分は海につながっており、潮の満ち引きで水面が 2 mほど上下する。

伊根の船屋は床下を船のガレージとする一種の高床住居といえるが、これと類似する「棚屋」の群れを海南島最南端の三亜市で発見した（図 7）。それは好漁場を求めて広東方面から移住してきた蛋民の住まいであり、河口付近の河岸と海岸に数え切れないほどの杭上住居が密集していた。水面と接する階下が漁船のガレージで、蛋民たちは階上に住んでいる。

わたしは 1984 年に南辺海（ナンビエンハイ）の砂浜に建つ高床住居を調査した（図 27）。一家の姓は陳である。陳家の住人は広州の神的という土地から渡海してきた。案内してくれた三輪タクシーの運転手は、先住漢族なのか漢化したリー族なのかは知らないが、岸辺を不法占拠する新来の漁民たちを「客家（クーチア）(よそもの)だ！」と吐き捨てた。漁民たちがやって来たのは、解放後のことという。調査家屋の住人の移住はつい最近で、高床住居を建てたのも調査時を遡る 3 ～ 4 年前であった。陳家の住居は、階下に船を納めるほど床が高くない。船は岸辺に繋ぎとめている。床を支える束柱と桁をうける柱を分離させる高床形式で、屋根・壁ともに椰子葉で葺き、垂木や木舞は竹である。小屋組は束立だがトラス風に筋交を併用しており、釘と鎹で留める。屋根は切妻造平入で、ベランダをおく前側の屋根を長くのばした招き屋根とする。

床上の平面は単純な 2 室構成で、閉鎖的な寝室(間口 4.2m ×奥行 4.8m)と一段床の低い開放的なベランダ部分(4.2m × 3.2m)とからなる。海に近いベランダをチ・ファン・ファンと呼んでいたが、これはおそらく「吃飯房」のことであろう。コンロ、鍋、水瓶などの炊具を部屋の片隅に集めて調理し、中央部分で食事する。寝室はパーンといった。これは「房（ファン）」の訛りか。チ・ファン・ファ

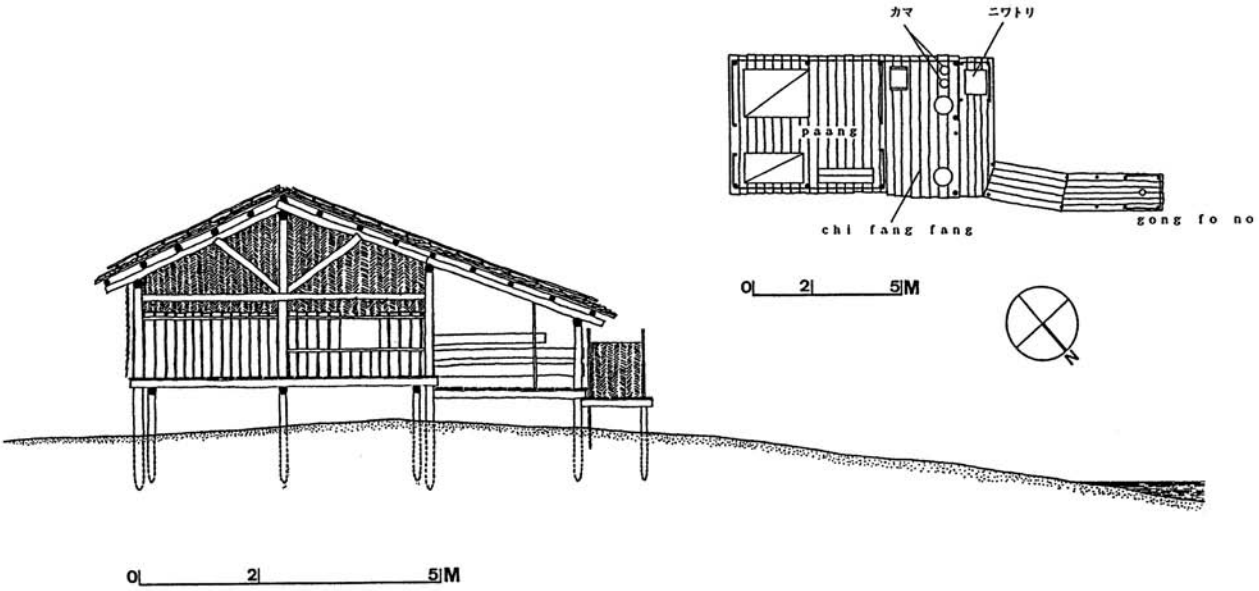


図 27　海南島三亜市南辺海の蛋民住居（浅川実測 1984）

ンの北側隅からは海にむかって廊下がのびる。その先端には 1.2m 四方の便所ゴン・フォ・ノを設けている。満潮になれば汚物は自動的に水洗されるのである。

この高床住居が「住宿船」から陸上がりの第一歩であるとすれば、1980 年代はすでにその第 2 段階にさしかかっていた。高床住居の背面にコンクリートの住宅が建設されていたのである（図 8）。それは国家もしくは州政府の補助によりおこなわれた住宅開発であった。この瓦葺きの新築住居をアァファン（瓦房）という。一方、椰子葉葺きの高床住居はトゥファン（草房）であり、両者の関係は丹後半島や能登半島でみる主屋と船屋の関係によく似ている。海辺にそって船屋もしくは船屋兼住居をまず建設し、その後、船屋と対面する陸側に居住専用の主屋を建てる。漂海民が陸地に定着するパターンの一つとして注目すべきであろう。

三亜と同類の沿岸水上高床集落は、香港・マカオから東南アジア方面にも数多く確認できる。マレーシアのケタム島（図 10）とペナン島ジェティ地区、マカオのコロアネ島船人街（図 9）、香港の鯉魚門と大澳などに大規模な水上集落が形成されている。いずれも福建・広東方面から渡来した華人漁民のスクウォッターである。とくに鯉魚門では、今でも家船が少なくなく、家船と水上高床住居の相関性を強く印象づけている（図 5）。

３－４　広州沙面にて

Ｙ字に分かれた珠江の支流が、広州市街地で一つに合流する白鵝潭の北岸に、沙面という地名の旧租界地区があり、そこに残る近代建築群は 1996 年に国の重点文物保護単位（日本の重要文化財に相当）に指定されたばかりである。この租界地区を彩るきらびやかな近代建築群と、白鵝潭にあふれる「住宿艇」の対照性は、まさに都市のもつ二面性を映し出すものであった。

かつて広州の水面には、紫洞艇、游河艇、住宿艇、過海艇という 4 種類の船が浮かんでいた[42]。紫洞艇とは酒宴を催す「酒舫」の一種である。船室は庁堂のよう広くて天井も高く、船板の両側面に飾窓をつけた。游河艇は珠江下りに使う四面吹き抜けの船で、両岸の景色を観賞できる。艇仔粥(こぶねがゆ)や茹でエビなどを食べながら、水辺の風景を満喫するのである。住宿艇はいわゆる家船だが、下級旅館のような役割を果たす場合も少なくなかった。近郷から広州を訪れる旅客の多くは、この小船に泊まるのを好んだという。また、住宿艇は「野鶏」すなわち娼婦の宿にもなった。過海艇は渡し船である。「海を渡る」とは大袈裟だが、広州人にとって珠江はたしかに海のように大きな川であった。過海艇には 2 列の座席があり、1 艘の船に座れるのは 10 人程度である。渡船を漕ぐのは蛋民の女の仕事であった。男たちは昼間、陸で仕事をしていたからである。

今では、これら 4 種類の船をみることはほとんどなくなった。周恩来の政策により、水上居民の宿舎が建設され、中山八路の東側には「党恩新街」という一画もある。陸上がりした蛋民たちが、共産党に感謝する気持ちを地名に込めたものである。ところが、2000 年の 2 月、10 年ぶりに広州を訪れ、白鵝潭のまわりをうろついていると、住宿艇とおぼしき小振りの船をしばしばみかけた。苫編みの屋根をかぶせる古式の船も走っていたが、大半は動力船で、屋形以外の甲板が非常に長くなっている。それら数艘が組になり、「漁欄」と称する海鮮市場の近くに停泊していたのである（図 6）。船からでてくる若者に、「船に住んでいるのか」と訊いてみたところ、その答えは

こうであった。

「陸に家はあるんだけれど、船でもよく寝るんだ。」

甲板のコンロで煮炊きをしたり、物干し竿に洗濯物をなびかせる船もまだまだたくさんみられる。季節が変われば漁場も変わり、漁場が変われば漁民は動く。動くためには船が必要で、たとえ「陸上がり」を済ませていても、漁が長びくならば船住まいをするほかない。住めば都というけれど、船住まいになれてしまえば、陸に戻るのが億劫になるのかもしれない。

４．東アジアの沿海文化

すでに語り尽くされていることだけれども、「倭の水人」の問題を最後にとりあげておきたい。『三国志』魏書・東夷伝の倭人の条（いわゆる魏志倭人伝）には、まず対馬国が「海物を食らいて自活し、船に乗りて南北に市糴（してき）す」とあり、一支（壱岐）国も「亦南北に市糴（してき）す」、末盧（まつら）国は「山海に浜（そ）いて居る。草木茂盛し行くに前人を見ず。好く魚鰒を捕え、水の深浅と無く皆沈没してこれを取る」と続く。そして、倭人の習俗としては、「男子は大小となく鯨面文身する。（略）夏后の少康の子会稽に封ぜられ、断髪・文身し亦以て蛟龍の害を避く。今倭の水人好く沈没して魚蛤を捕え、文身し亦以て大魚・水禽を厭（はら）う」と記す。

要するに、倭の水人は船にのって交易をおこない、海に潜って「魚鰒」や「魚蛤」を捕えることが巧みであった。これは、家船で移動しながら潜水漁撈をおこなうアマたちの姿とあきれるほどに重なりあう。日本のアマとは、すなわち倭の水人の末裔である、という言い方もおそらくは許されるであろう。弥生時代の潜水漁撈を裏付ける考古学・人類学的なデータも少なくない[43]。佐賀県呼子（よぶこ）町の小川島と加部島の弥生貝塚には、たくさんのアワビやサザエが含まれており、骨や角（つの）を削って作った「アワビおこし」と呼ばれる道具は、壱岐の原（はる）の辻とカラカミ、佐賀県の菜畑や山口県の吉母浜（よしもはま）などの弥生遺跡でみつかっている。また、アマに特有な外耳道骨腫という病気は、縄文人骨と弥生人骨の両方に認められるが、弥生の場合、山口県響灘（ひびきなだ）沿岸の土井ヶ浜遺跡では男が 18 %、女が 6 %という出現率を示すのに対し、佐賀県内陸部の三津永田（みつながた）遺跡では一例の人骨もその症状を残していなかった。土井ヶ浜の人びとが響灘で潜水漁撈をおこなっていた可能性を示唆するデータと評価できるかもしれない。

さて、文身（いれずみ）して「大魚・水禽を厭（はら）う」倭の習俗は、「断髪・文身し亦以て蛟龍の害を避く」会稽の人びとの習俗と一致している。ここにみる倭と越の共通性に着目した大林太良は、弥生時代の漁撈文化を「江南系」と呼ぶが、同類の海人文化が西日本から朝鮮半島、さらには江南から海南島方面にまで連続する分布を重視するならば、むしろ「東シナ海的」という表現のほうがふさわしく、それはまた東南アジアの「パシシル文化」と構造的に類似するという意見を述べている[44]。

パシシル文化とは、沿海文化のことである。

マレーシアからインドネシアにかけての沿海地域では、民族や言語は異なるけれども、漂泊的な漁撈と船による交易を背景にして、非常に均質な文化がひろがっている。それをパシシル文化と呼んでモデル化したのは、アメリカの人類学者、ヒルドレッド・ギアーツであった[45]。これをうけて大林は、東シナ海沿岸域についても、古代の海人文化から現代まで、このモデルによって説明できると主張している。

東アジアおよび東南アジアにおける沿海文化圏は、興味深いことに、家船居住の分布と重なりあっており、潜水漁撈と家船はかなり早くから相関性をもっていたはずである。たとえば中国では、『漢書』五行志に「呉の地、船を以て家と為す」という記載があり、屋形船と呼びうる構造船の明器も広州漢墓などから数多く出土している[46]。この時代に並行する日本に「江南系」の漁撈をいとなむ水人がいたとすれば、「船を以て家と為す」ことがあったとしても不思議ではない。しかし、当時の日本は丸木船の時代であった[47]。木を刳りぬいただけの船を「家と為す」ことが、はたして可能であったのだろうか。常識的にそれは、否定されるべき問いではある。けれども、ここでもう一度、家船の特性をふりかえっておきたい。

羽原又吉が漂海民の条件の一つとして掲げるように、家船とは「小舟を住居にして一家族が暮らす」ものである[48]。沖縄のサバニ、あるいは山陰のソリコのような素朴な船でさえ、苫葺きの屋根を掛ければ仮の宿となる。しかも、サバニは南洋、ソリコは北陸にまで船足を伸ばす航海圏を誇っている。船に居住性が備わっていなければなしえない出漁域の広さと言わざるをえない。ときには船を寝宿とし、多くは浜に小屋掛けして、じわりじわりと船を進めていったのだろう。こうしてみると、弥生時代の丸木船を「家と為す」ことも、充分ありえたのではなかろうか。四隅突出型古墳や素環頭（そかんとう）鉄刀などの分布に映し出された越（北陸）と出雲（山陰）の交流を、海を媒介としてとらえる「日本海文化」論が、1980 年代から一部の考古学者によって提唱されている[49]。古代の日本海文化もまた一種の沿海文化であり、海岸沿いの航海が文化伝播をもたらしたのであろうが、その背景には、素朴な居住性をともなう船の存在があったように思われてならない。

謝辞

本稿は 2000 年 9 月 6 ～ 7 日、台湾の中央研究院で開催されたシンポジウム「被植民都市與建築国際学術研討会（International Symposium on Urban and Architectual Histories under Colonial Rule in Asia)」において口頭発表し、後にシンポジウムの成果報告書に中国語で投稿した論文「東亜漂海民和家船居住」の素原稿に、最近集めたデータを加えて補筆したものである。海外の国際シンポジウムで発表するにあたり、日本の海民居住文化の紹介を第一の目的としたため、概説的描写の部分が多くなっているが、筆者個人のデータと見解を示すべく努力したつもりである。まずは、シンポジウムにご招待いただいた中央研究院台湾史研究所の黄蘭翔先生に対し、この場を借りて感謝の気持ちを記したい。また、この論文は、当時、筆者が併任助教授を務めていた京都大学大学院人間・環境学研究科の住環境保全論演習において、修士課程の長沼さやかさん（現在、総合研究大学院大学博士課程から広州の中山大学に留学中）と積み重ねた研究成果の一部でもある。長沼さんのほか、古川友明さん（富山市埋蔵文化財センター)、小島芳孝さん（石川県埋蔵文化財センター)、田中義則さん（輪島市教育委員会)、工楽善通さん（東アジア・ユネスコセンター)、柴田恵司さん（長崎大学名誉教授)、山崎聡さん（長崎県教育委員会）にも多くの資料と情報をご提供いただいた。ここに感謝申し上げるとともに、本稿の文責はわたし一人にあることを明記しておく。なお、本研究は 2001 ～ 2003 年度の科学研究費基盤研究 C「東アジア漂海民の家船居住と陸地定住化に関する比較研究」の成果をも含んでいる。この科学研究費等により、タイ、マレーシア、ベトナムでの現地調査をおこなった。タイとマレーシアの調査ではチャウィーワン・デンパイブーン女史（タマサート大学）と張漢賢助手（鳥取環境大学)、ベトナム香河流域の調査では、グエン・ファン・フック氏（フエ・モニュメント保存センター）の労を煩わせた。また、ピサノロークの筏住居の作図は、北野陽子さんと小倉依子さんの手になるものである。末筆ながら、記して感謝の気持ちに代えさえていただきたい。

注

1) 東アジアの鵜飼については、可児弘明(1966)『鵜飼－よみがえる民俗と伝承－』中公新書を参照。
2) 可児弘明(1970)『香港の水上居民』岩波新書
3) 蛋民に関するまとまった研究業績はそれほど多くない。以下、代表的論著を示す。林耕(1939)「蛋家の来歴とその生活」『アジア問題講座』9、p.373-412。陳序経(1946)『蛋民的研究』商務印書館。小川博(1969a)「中国史上の蜑　～蜑（蛋）についての諸学説の沿革について（一)」『海事史研究』12 号、p.123-157。同(1969b)「中国史上の蜑　～蜑（蛋）についての諸学説の沿革について（二)」『海事史研究』13 号、p.15-38。同(1970a)「日本における漁撈民俗研究の動向」『海事史研究』15 号、p.64-86。同(1970b)「中国史上の蜑　～蜑（蛋）についての諸学説の沿革について（三)」『海事史研究』14 号、p.67-78。同(1971a)「中国史上の蜑　～蜑（蛋）についての諸学説の沿革について（四)」『海事史研究』16 号、p.86-101。同(1971b)「中国史上の蜑　～蜑（蛋）についての諸学説の沿革について（五)」『海事史研究』17 号、p.82-88。可児弘明 (1970 ：前掲注 2)、木内裕子(1987)「中国の海人・水人と日本」『日本の古代８　海人の伝統』中央公論社、p.291-316。伊藤彰(1990)「鐘ヶ崎と海人文化」『玄界灘の島々　海と列島文化 10』小学館、p.381-413。伊藤亜人(1992)「中国と日本の漂海漁民」『東シナ海と西海文化　海と列島文化 4』小学館、p.249-272。伍 鋭麟 WU Yuey-len(1936) “ The Boat People of Shanam ” *NANKAI SOCIAL & ECONOMIC QUARTERLY* vol.9 no.3, p.613-665. WARD, Barbara E.(1954)“ A HongKong Fishing Village ” *Journal of Oriental Studies* vol.1 no.1 ,195-214. WARD, Barbara E.(1967)“ Chinese Fishermen in Hong Kong :Their Post-Peasant Economy ”*SOCIAL ORGANIZATION; Essays Presented to Raymond Firth,* p.271-288, Chicago. WILSON Menard (1969)“ The Boat-People of Hong Kong ”*The Michigan Quarterly Review* vol.8, p.189-193. ANDERSON, E.N. (1970)“ The Boat People of South China ”*Anthropos* vol.65 no.1/2, p.248-256. 葉 顕恩 YE Xian' en（1997)“ Notes on the Territorial Connections of the Dan ” in DAVID Faure ed. *DOWN TO EARTH　-The Territorial Bond in South China-,* p.83-88, Stanford University
4) 劉　美崧(1996)「古百越族及其後裔的海洋文化」、広東炎黄文化研究会編『嶺山喬春秋　－海洋文化論集－』広東人民出版社、p.255-279
5) 以下の論著を参照。羽原又吉(1949)『日本古代漁業経済史』改造社。河岡武春(1983)「黒潮の海人」『日本民俗文化大系 5　山民と海人』小学館、p.363-393。谷川健一(1990)『海女と海士』日本民俗文化資料集成４、三一書房。北見俊夫(1992)「東シナ海の海人文化」『東シナ海と西海文化　海と列島文化４』小学館、

p.273-326。田辺悟(1990)『日本蜑人伝統の研究』法政大学出版局、田辺悟（1998)『近世日本蜑人伝統の研究』慶友社。なお、アマとは言うまでもなく潜水漁労民をさすが、日本では男性を「海士」、女性を「海女」と漢字表記する。

6) 辻井善弥(1980)「家船と潜水漁」『講座日本の民俗５生業』有精堂、p.152-168

7) 海人の蛇神信仰については、以下の論著を参照。谷川健一(1992)『漂海民　ー家船と糸満ー』日本民俗文化資料集成 3、三一書房。谷川健一(1995)『古代海人の世界』小学館。

8) 浅川(1994)『住まいの民族建築学　ー江南漢族と華南少数民族の住居論ー』建築資料研究社

9) 注 10 のほか、以下の文献の書名に注目されたい。羽原又吉(1963)『漂海民』岩波新書。藪内芳彦(1969)『東南アジアの漂海民　ー漂海民と杭上家屋ー』古今書院。門田修(1986)『漂海民　ー月とナマコと珊瑚礁ー』河出書房新社。野口武徳(1987)『漂海民の人類学』弘文堂。

10) WHITE, W.G. (1925) *THE SEA GYPSIES OF MALAYA,* White Lotus Press. この書は松田銑が邦訳し、ウアイト W.G.(1943)『漂海民族　ーマウケン族研究ー』として鎌倉書房から出版されている。

11) SOPHER, David E. (1965) *THE SEA NOMADS -A STUDY BASED ON THE LITERATURE OF THE MARITIME BOAT PEOPLE OF SOUTHEAST ASIA-*, Syracuse University.

12) 羽原又吉 1963（前掲注 9）

13) タイの筏住居ルアン・パエについては、チャウィーワン・デンパイブーン女史の一連の論文とそれを集成した学位論文に詳しい。DENPAIBOON, Chaweewan. et.al. (2000a)“ Typology and life style analysis of the raft house(*ruan pae*) in riverine settlements in thailand ”『日本建築学会計画系論文集』№ 533,p.173-180. DENPAIBOON, C. et.al. (2000b) “ The development of and disappearance of the raft house(*ruan pae*) habitation in bangkok during the late 18th to 20th century ”『日本建築学会計画系論文集』№ 537, p.241-248. DENPAIBOON, C. et.al.(2002a) “ Transformation of the canal-side settlements in greater bangkok ”『日本建築学会計画系論文集』№ 551, p.245-252. DENPAIBOON, C.et.al. (2002b)“ Relationship between lifestyle of inhabitant and canal-side enviroments in the process of transformation in greater bangkok ”『日本建築学会計画系論文集』№ 552, p.263-270. DENPAIBOON,Chaweewan(2001) *Transformation by Modernization of the Traditional Waterfront Settlements in the Context of their Coexistence with the Aquatic Environmnt: A Case Study of Raft Houses and Pillar Houses in Thailand* , Kyoto University Phd.

14) Sopher 1965 (前掲注 11）

15) 海賊化した漂海民については、以下の論著を参照。生田滋(1987)「藤原純友とバイキング」『日本の古代 8　海人の伝統』中央公論社、p.317-334。高橋公明(1992)「中世の海域世界と済州島」『東シナ海と西海文化　海と列島文化 4』小学館、p.163-205。網野善彦(1998)『海民と日本社会』新人物往来社。

16) 金　柄徹(1996)「船世帯民再考―家船民の陸地との交渉の分析を中心に」『民族学研究』61 巻 1 号、p.28-47

17) 伊藤彰 1990 (前掲注 3）

18) 対馬教育会(1928)『対馬島誌』

19) 瀬川清子(1940)『海女記』ジープ社。同(1955)『海女』古今書院。

20) 瀬川清子 1940(前掲注 19)

21) 能地と二窓の家船居住民については、以下の文献を参照。河岡武春(1987)『海の民　ー漁村の歴史と民俗ー』平凡社選書。同(1993)「漂泊漁民の伝承文芸浮鯛系図考」『日本歴史民俗論集 8　漂泊の民俗文化』吉川弘文館、p.354-36。草の根出版会(1999）『日本民俗写真大系　ー瀬戸内海の東西ー』日本図書センター。

22) 柳井由美子・八束美由紀(1971)「瀬戸内に家船を訪ねて　ー吉和の家船ー」『海事史研究』16 号、p.120-133

23) 浅川(1981)「漁村のくらしと地域文化財」『杵築の町づくり』杵築市、p.40-62

24) 糸満の家船漁民については、以下の論著を参照。野口武徳(1982a)「沖縄糸満漁民研究の一側面」『日本常民文化紀要』第八輯(I)、p.237-270。同(1982b)「家船部落の社会構成　ーとくに社会集団を中心としてー」『日本常民文化紀要』第八輯(II)、p.193-227。同(1983a)「船霊とエビス」『日本民俗文化大系 5　山民と海人』小学館、p.394-420、同(1983b)「家船の崩壊過程と社会的緊張」『日本常民文化紀要』第九輯、p.145-175。同(1984)「海上漂泊漁民の差別の構造（二）」『日本常民文化紀要』第十輯、p.225-252。同 1987（前掲注 9)。同(1992)「海上漂泊漁民の陸上定着過程」『漂海民　ー家船と糸満ー』三一書房、p.389-410。同(1994)「家船と糸満漁民　ー水上生活者の移動と定着ー」『日本歴史民俗論集 8　漂泊の民俗文化』

吉川弘文館、p.370-376 。谷川 (1992 ：前掲注 7)。上田不二夫(1992)「糸満の旅漁民」『琉球弧の世界　海と列島文化 3』小学館、p.479-502。

25) 木島甚久(1944)『日本漁業史論考』誠美書閣

26) 柴田恵司(1984)「長崎の海人舟」『長崎県文化財調査報告書』42 集・特集「長崎県の海人」、p.275-283

27) 広島県教育委員会(1969)『昭和 43 年度箱崎能地地区家船民俗資料緊急調査概報』。同(1970)『家船民俗資料緊急調査報告書』。可児弘明・中村昭夫(1995)『ビジュアルブック水辺の生活誌　船に住む漁民たち』岩波書店。

28) 広島県教育委員会 1969（前掲注 25）

29) 中村茂樹・畔柳昭雄・石田卓矢(1998)『アジアの水辺空間　－くらし・集落・住居・文化－』鹿島出版会

30) 瀬川(1955 ：前掲注 19）

31) 宮本常一(1975)『海の民（著作集 20)』未来社

32) 瀬川(1955)は『輪島誌』に記載ありとする。これに類する記載として、筆者自身が確認したのは『石川県鳳至郡誌』(1923)であるが、ここでは瀬川(1955)から転載する。

33) 小嶋芳孝(1990)「舳倉島と能登　－考古学からみた海民の歴史－」『日本海と北国文化　海と列島文化１』小学館、p.159-192 。以下、能登に関する記載の多くはこの論文に負うている。

34) 地井昭夫(1989)「海女の住居と集落　船住まいの陸上がりと来訪神型集落の形成」、森浩一編『古代日本海域の謎Ⅰ　－住まいからみた人と神の生活－』新日本人物往来社、p.154-167

35) 宮本常一(1964)『海に生きる人びと』未来社

36) 浅川(2000)『離島の建築』日本の美術 406、至文堂

37) 可児(1970 ：前掲注 2)および野口(1992 ：前掲注 24)を参照。

38) 石川県立郷土博物館(1975)『海士町・舳倉島』奥能登外浦民俗資料緊急調査報告書

39) これと関連して想起されるのは、マカオや香港に林立する超高層アパート群である。マカオも香港も、もとは漁村集落が点在する離島・半島にすぎなかった。急峻な山裾がそのまま海岸線に落ち込む地形条件は、能登半島や七ツ島とほとんど変わるところがない。そこにイギリスとポルトガルが西洋型の巨大都市を出現させ、大量の下層労働人口を大陸から吸収したわけだが、その労働者たちにあてがわれる土地は存在しなかった。だから、かれらは船を住まいとしたのである。その船住民たちが、今は超高層のアパートに住んでいる。「超高層のアパート」といえば聞こえはよいが、その実情はせいぜい 2 室どまりの借家であり、それが倒れんばかりの高さに積み上げられた建物にすぎない。だから、現代都市の象徴かに映る超高層アパート群も、見方を変えれば、平坦地が極端に少ない海岸線に密集する漁村型高密度住宅の極限状況と言ってもおかしくないだろう。

40) 和久田幹夫(1989)『舟屋むかしいま　丹後伊根浦の漁業小史』あまのはしだて出版

41) 浅川(1990)「中国の民居(3) 南方少数民族の高床住居」『日中建築住宅情報』61 巻 6 号、p.17-22

42) 黄愛東西(1999)『老広州』江蘇美術出版社

43) 佐原真(1996)「魏志倭人伝の考古学(7)」『歴博』77 号、p.30-31

44) 大林太良(1983)「海と山に生きる人びと」『日本民俗文化大系 5　山民と海人』小学館、p.5-64。同(1991)「海人の系譜をめぐって」『古代海人の謎　－宗像シンポジウム－』海鳥社、p.21-41

45) GEERTZ, Hildred(1967) “ Indonesian Cultures and Communities ” , *INDONESIA* , p.58-70, HRAF Press

46) 王冠倬編(1991)『中国古船』海洋出版社

47) 川崎晃稔(1991)『日本丸木舟の研究』法政大学出版局。石塚尊俊(1996)『鑪と刳舟』慶有社

48) 羽原又吉 1963（前掲注 9）

49) 日本海文化論については、以下の論著を参照。高瀬重雄(1984)『日本海文化の形成』名著出版。北見俊夫(1989)『日本海島文化の研究』法政大学出版局。森浩一編(1989)『古代日本海域の謎Ⅰ　－住まいからみた人と神の生活－』新日本人物往来社。藤田富士夫(1990)『古代の日本海文化　－海人文化の伝統と交流－』中公新書。

参考文献

伊藤亜人(1983)「漁民集団とその活動」『日本民俗文化体系５ 山民と海人』小学館、p.319-360

大林太良編(1975)『日本古代文化の探求 船』社会思想社、同編(1992)『海から見た日本文化 海と列島文化 10』小学館

大林太良(1983)「海と山に生きる人びと」『日本民俗文化大系５ 山民と海人』小学館、p.5-64。同(1987)「沿海と内陸水界の文化」『日本の古代８海人の伝統』中央公論社、p.9-44。同(1996)『海の道　海の民』小学館

長沼さやか(1999)「明代海禁と蛋民」平成 10 年度筑波大学人文学類卒業論文。同(2001)「東アジアの家船居住」平成 12 年度京都大学大学院人間環境学研究科修士論文

中村治兵衛(1995)『中国漁業史の研究』刀水書房 、p. 111-180
西山卯三(1975)「舟住まい」『日本の住まい(壱)』勁草書房、p. 297-324
宮本常一(1974)『宝島民俗誌・見島の漁村（著作集 17）』未来社
守屋　毅（1991)「瀬戸内の文化と芸能　船からみた民俗誌」『瀬戸内の海人文化　海と列島文化 9』小学館、p.255-282
山階芳正(1952)「五島の家船について」『漁民と対馬（九学会年報第四集）』関書院、p. 39-48
張　震東・楊　金森(1989)『中国海洋漁業簡史』海洋出版社
元　貴九(1990)「明清蜑民考略」『史学集刊』1990-1 、p. 16-23
劉　錫蕃(1934)『嶺表紀蛮』商務印書館、p. 20-26

（2002 年 12 月 4 日受理）

［附記］

本論文の中国語原稿はシンポジウム報告書に先だち、以下の雑誌に掲載された。

淺川滋男「東亜的漂海民和家船住宅」

APARP (Northeast Asia Research Paper) No.17、p. 1-44,中央研究院亜太研究計画,台北